



—昭和大学歯科病院の理念—

患者本位の医療
先進医療の推進
良き歯科医師の育成

発行責任者 病院長 榎宏太郎
編集責任者 広報委員長 高橋 浩二
〒145-8515 東京都大田区北千束2-1-1
TEL 03-3787-1151(代表)

ホームページ: <http://www.showa-u.ac.jp/SUHD/index.html>

味覚とその障害について

臨床病理診断科 科長 美島 健二

テレビや雑誌でみかけた料理の味をいくら想像してみても実感がわかないのはなぜでしょうか。それは食べ物を味わう時に必要な味覚が、我々の生存に欠くことの出来ない特別な感覚だからです。それでは、この味覚というものは体の中でどのように感じられているのでしょうか。

食べ物を口の中に入れて感じる味覚は食欲をそそり、体の中に必要となる大切な食物の摂取を促進する信号となります。一方、有害な物質を取り込んだ時には不快に感じ吐き出すことにより体を毒物から守る重要な役割を担います。この味覚は、主に舌や口蓋粘膜に存在する味蕾の味細胞で受容された後、味覚神経により電気信号に変換され延髄、視床、大脳皮質味覚野に至り、最終的に味としての知覚を生み出します。口の中に入った食べ物は咀嚼されることにより、その中の味物質が唾液中に溶け込み味蕾の中の味細胞に到達するわけです。この味蕾では5種類の味を感じ分けることが出来ます。すなわち、甘味(砂糖や人工甘味料)、苦味(茶などに含まれるタンニン)、塩味(食塩)、酸味(クエン酸や酢酸など)およびうま味(昆布やかつお節の出汁など)が基本味となります。この中で、甘味やうま味は、それぞれ糖分やアミノ酸などの体にとって有益な栄養源であり、常においしいと感じることにより取り込むように進化してきました。特に、うま味は食べ物に奥行きを出す調味料の原料にもなり、グルタミン酸がその主な成分です。このグルタミン酸は、肉などの熟成期間に増えることも知られ、食べ物のおいしさを決める大きな要素となっています。一方、酸味、苦味、および強い塩味は不快な味

を引き起こし、腐敗したものや毒物を体の中に取り込まないように知らせる危険信号となっています。

このような味覚が低下したり消失したりする状態を味覚障害と言います。味覚障害には、単に味覚の低下から味の変化や常に異常な味を自覚する異常味という症状があげられます。味覚を司る味蕾は成人で7,000~10,000個存在していると言われていたのですが、10日程度の短い間隔で常に入れ替わっています。この味蕾は、栄養障害、加齢、薬剤、および放射線照射によりその数が減少することが知られ、味覚障害の原因となりうると考えられています。また、味覚障害を伴う疾患としては、脳卒中による味覚中枢の障害、亜鉛欠乏、舌炎、口腔乾燥症、鉄欠乏性貧血などがあます。したがって、今後、超高齢社会を背景に、味覚障害患者の増加が懸念されています。



日常可能な味覚障害の予防法は、亜鉛欠乏の予防としてカキなどの魚介類、大豆やブロッコリーなどの亜鉛を多く含む食物の摂取が挙げられます。また、もし、最近味がおかしいと思ったら是非歯科病院を受診して下さい。全身性疾患の部分的症状として味覚異常が生じている可能性も考えられ、専門の歯科医師が適切に診断し治療にあたります。

臨床病理診断科 紹介

臨床病理診断科は、平成20年度に開設され、歯科病院における病理診断全般を担当しています。その業務の内訳は、病理組織・細胞診断、術中迅速診断および病理解剖からなります。

病理組織診断:

臨床各科で採取された患者さんのお口の中にできた病変(生検)を顕微鏡により詳細に観察します。そして得られた顕微鏡像から、その病変がお薬で治癒する良性の病変であるのか、あるいは手術が必要な悪性の病変であるのかを決定する“確定診断”を行います。また、その結果、手術による摘出が必要だと判断された場合は、摘出された組織(手術材料)をさらに細かく分割し、病変の進み具合、悪性度の再評価および合併している他の病変がないかなどの判断を行います。

細胞診断:

患者さんのお口の中にできた病変の表面からこすり取った細胞や深部に位置する病変部より注射針で採取した細胞をプレパラートに塗抹します。塗抹した細胞の形態を顕微鏡により観察し、その病変の良・悪についての判定を行います。組織診がある程度の量の組織を必要とするのに対して、細胞診断では診断に必要とされる検体量が少なく容易に採取が可能ですが、診断の確実性は組織診診断に比べると劣ります。

術中迅速診断:

手術中に組織の一部を採取し、病変の診断、手術範囲の決定あるいは病変の取り残しがないかなどの判断を行うことにより外科手術の精度の向上に役立っています。

私どもが直接患者さんにお会いする機会は少ないですが、病変の確実な診断のために、臨床各科と連携して、お口の中を直接拝見させて頂くこともあります。病理診断の結果は、治療法の選択、

予後の予測など患者さんのQuality of Life(QOL)に直結していることから、各診療科と緊密な連携をとり質の高い医療を提供できるよう細心の注意を払っています。また、これらの歯科病院内の業務に加え、昭和大学病院の臨床病理診断科と連携して口腔癌の診断に従事しています。加えて、院外の病院歯科や歯科医院から依頼された病理組織診断についても積極的に対応し、周辺地域の方々のお役に立てるよう努めております。その一貫として、他院で診断された症例に対しても客観的に評価し説明させて頂く、いわゆる“セカンドオピニオン”の相談にも対応しております。

近年、様々な疾患において遺伝子や遺伝子が作り出す蛋白質に変化が認められることが報告され、これらの情報に基づいて新しい診断法や治療法の開発が試みられています。当科においても、臨床各科や医学部病理学教室との緊密な連携を図ることにより、遺伝子やタンパク質の網羅的解析などの先端的技術を積極的に取り入れることにより精度の高い診断法の確立や予後の予測にも取り組んでおります。

現在、病理診断に従事しているスタッフは、歯学部口腔病理学部門と業務を兼任している8名よりなります。その中で、口腔病理専門医は4名(美島、河野、入江、安原)であり、同一病変のダブルチェックないしトリプルチェックによる診断精度の維持・向上に努めております。

臨床病理診断科 科長 美島 健二



歯科医師紹介:POSを活用してインプット中心から患者さんにとっての価値中心の医療へ
総合診療歯科 講師 勝部 直人

皆さん、“総合診療歯科”って何の病気を治す診療科かご存知ですか？当病院において虫歯は“美容歯科”、入れ歯は“補綴歯科”、歯を抜くのは“顎顔面口腔外科”が担当しています。では“総合診療歯科”の専門は何でしょうか？その答えを明確に答えられる人は皆無です。何故なら「総合診療歯科」が診ているのは**病気**ではなくて、患者さんの抱える**病(やまい)**だからです。

もちろん病態を把握するために医学的概念である**病気を把握することは重要**ですが、同時に患者さんの個人的な体験である**病(やまい)**の両面への理解に努めることが「総合診療」には必要です。例えば、**病(やまい)**として『食べにくい』という訴えをお持ちの患者さんがいたとしても、その要因は“虫歯”・“歯周炎”で痛い、“歯がない”ことなど様々です。そして『食べにくい』は、日常的に食している米が『食べにくい』のか、好物の海苔が『食べにくい』のか、普段食べることの少ないスルメが『食べにくい』のか、その問題を解決すべきかも含めて、患者さんの嗜好や背景も含めた対応を考える必要があります。

歯科における大半の**病気**は、感染症であると同時に慢性疾患である“虫歯”や“歯周病”、それに伴い発生する“(歯の)欠損”です。つまり歯科治療は「目で診る」ことができる口腔や歯の異常を対象とする場合がほとんどで、しかもその**病気の多く**は患者さんの生活習慣や全身の状況に影響されて発現します。そのため、本来、歯科医療における診断と治療方針の決定、あるいは治療過程は、「歯」だけでなく患者全体をみるというプロセスを必要とする領域であり、**病(やまい)**を診る「総合診療歯科」は歯科の基軸であると考えられます。

私達は患者さんの**病(やまい)**を的確に診るために、POS(Problem-Oriented System;問題志向型システム)を基軸とした診療を実践しています。POSとは患者さんの持っている医療上の問題に焦

点を合わせ、患者さんにとって最高のケア(best patient care)を考え、医療情報を医療者間で共有することで問題を解決しようとする一連の作業システムや考え方



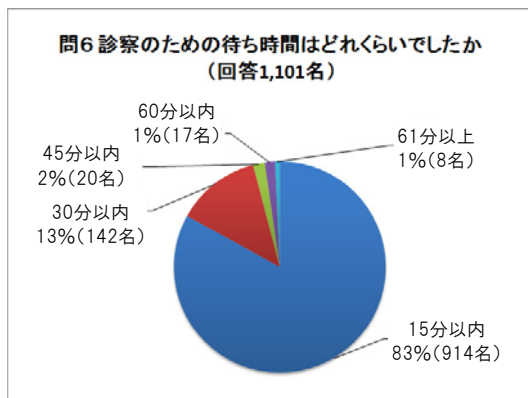
ことです。歯が溶ける“虫歯”も、歯を支える骨を失う“歯周病”も、発症するほど**病気が進行**すると治りません。これからの歯科医療は、“虫歯”や“歯周病”などの**病気にならないための予防**、病気を発症した人に対しては**治療**、そして、これら慢性疾患を管理し上手く**共生**するようにしなければなりません。私の診療チームでは、POSを使って患者さんの価値に合わせて、**患者さんと共通の目標**を設定して治療を行っています。私達はこの目標達成のために、必要な科学的根拠のある診療をカンファレンスで討論し、当事者(患者さん)自らの健康獲得行動を啓発することで、皆さんの健康を願って治療に取り組んでいます。



週末は子供達のサッカーコーチをやっています。サッカーと同じように、私達は診療において医療情報を共有するチームで頑張っています。

患者満足度アンケート集計結果報告

患者満足度調査を、平成27年2月5日(木)～9日(月)の4日間に於いて行い1,117名の方からのご回答を頂きました。



七夕イベント 報告

4階小児歯科外来・2階病棟にて、七夕かざりを設置致しました。子供さんたちの、願いを込めて描いた短冊が、星に届くといいですね。

昭和大学では、平成27年7月7日 午後8時～10時に「七夕」ライトダウンに参加し、2時間消灯に協力し、温室効果ガスの排出量削減および節電に努めました。

事務課



小児歯科の七夕かざり

公開講座 開催報告

7月11日(土)13時より、臨床病理学・美島教授の司会にて、頭頸部腫瘍センター長・嶋根教授による「お口の中のがん治療ってどんななの?」、木本歯科衛生士による「お口の清掃と全身のかかわり」の講義が行われました。51名が受講され、参加者には歯科用品等がプレゼントされました。

また開催に際し、ご尽力くださいました皆様ありがとうございました。

事務課



公開講座の様子

編集後記

長雨、猛暑、大雨と不快指数120%(個人的な体感指数ですが..)の日々が続きますが、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。空調を利用して室内の温度、湿度をコントロールする。大雨、猛暑が著しい場合は外出をできる限り控えるなどご自分の身は自ら守りましょう。歯科病院の診療予約があっても、大風、大雨、猛暑などでアクセスや体調への影響が考えられる場合はどうぞ電話で予約を取り直してください。歯科病院の安全、安心の医療においては患者さんが病院に向われる時のことも配慮しております。(K.T)

患者さんからの、ご意見等を参考に今後共、より良い病院を目指し努力してまいります。調査に、ご協力有難うございました。

事務課